

海外活動報告

国際会議出席報告

4月5, 6, 7日に英国エクセター大学で行われた The Prehistoric Society (先史学会) 総会に文部省国際研究集会派遣研究員として出席し、発表を行った。総会のテーマは“Wetland Revolution in Prehistory”で、筆者は「日本の低湿地遺跡」という題で発表を行った。これまで、日本の大規模発掘が海外に紹介されることがなかったので、琵琶湖の栗津湖底遺跡、河内平野の近畿自動車道関連調査、山形県押出遺跡などの発表は聴衆に驚きを与えたようであった。会議の後、アイルランドの泥炭遺跡の見学会に参加して保存状態に恵まれた新石器時代から鉄器時代にかけての集落遺跡とそこから伸びる木道を実見することができた。筆者の発表の内容は、1992年の“Proceedings of the Prehistoric Society”に所収予定である。 (松井 章)

1990年7月23日から8月12日までソ連アカデミア歴史・言語・哲学研究所 (A. P. デレビヤンコ所長) 主催の「北・中央・東アジアとアメリカの旧石器時代の編年学国際会議」に出席し、発表した。フランス、ドイツ、アメリカ、カナダ、インド、中国、韓国などの研究者の参加があった。ノボシビルスクで5日間の研究発表が地域別に行われた。石器研究を中心にせざるを得ない日本人にとってドイツの原人の住居跡や北アメリカのマンモスの糞の話は、生活復元のイメージをふくらませる好材料であった。その後の二週間のエクスカーションは、アルタイ山脈北麓、エニセイ川流域、バイカル湖南岸の3コースがあり、私はアルタイのコースに参加した。夏ということもあり、各コース沿いでは研究所の発掘が数多く実施されており、そして現場や遺物が直接観察できる便宜が与えられた。とくにアルタイはソ連旧石器の重点フィールドであり、ゴルノ・アルタイツクの南にあるデニソワ洞穴の付近に調査基地が設けられている。今回のエクスカーションでこの未開放地に外国人が大勢来るとあって、約1年前から数棟のバンガロー、サウナ、そして橋などの建設が進められてきたそうである。とにかく、ソ連考古学始まって以来のイベントであるので、この時は各所で大サービスに浴することができた。オカラドニコフ洞穴やデニソワ洞穴などの今から3~4万年前の中期旧石器時代末の資料 (ルヴァロアポイントやムステリアンポイント) を観察しながら実測できた。西アジアやヨーロッパと直接つながるこれらの技術の拡散を理解するためにも、今後アルタイ山脈南麓の中国新疆ウイグル自治区での洞穴遺跡などの多層遺跡の発見と北麓との対比が望まれよう。 (佐川正敏)

1990年6月13日から6月24日まで、文部省国際研究集会派遣研究員として、イギリスの大英博物館主催の国際会議「金属文化財の表面着色と表面加飾」に参加した。古代から製作されてきた金属文化財の表面装飾技法を考古学、歴史、技術史、美学・美術史的観点から総合的に捉え直すことを目的として開催された、たいへんユニークな国際会議であった。世界13ヶ国総勢約250名の参加者があった。私の発表題目は、「日本の伝統的合金」。最新の表面分析手法を用い

て、日本の近世において確立された金属表面着色技法のメカニズムのキャラクタリゼーションを行い、完成度の高い技術水準が非常に簡素な方法によって生み出されたことを紹介した。近代西洋科学の本格的な導入以前に、手作業による経験の積み重ねから生み出された日本の伝統的金属着色技法は、各国から参加した研究者の注目を集めた。特に「赤銅（しゃくどう）」については、古代ギリシャ・ローマ、さらには中世インドやチベットにその類型を求め、「シャクドウ・タイプ」として汎世界的な視野で捉えようとする機運が生まれていることは喜ばしいことであった。国際会議のあと、ロンドン市内のロンドン大学、ヴィクトリア・アルバート博物館、さらにはベルギー王立文化財研究所に立ち寄り、金属文化財の材質研究と保存法について討論をする機会を得た。

(村上 隆)

海外調査研究

アンコール遺跡群の調査 1991年3月に上智大学が主体となって組織した第五次アンコール遺跡研究・国際調査団に加わって、三週間カンボジアに行き、アンコール遺跡群の調査を行った。

第五次アンコール遺跡群調査団は、1. アンコール遺跡群のうちバンテアイ・クデイの保存計画を策定するための調査、2. プノンペン芸術工科大学の学生の現地研修、3. 遺跡の保存のための現況目録作成、を主な目的とした。いずれの作業も、本格的保存・修復のための基礎的な予備調査である。

私はバンテアイクデイでの発掘調査を担当した。発掘調査と言っても調査区は幅2m、長さ15m、調査期間は10日間だから、試掘して様子を探る調査である。発掘区は前柱殿・側柱殿と呼ぶ二つの建物の間で、二つの建物の関係を知ることを目的とした。調査の結果、第二次大戦後、フランス極東学院が行なった修復の際に基壇周辺を掘り下げていること、瓦片が出土しないため付近に瓦葺建物がないこと、などが分かった。本格的で系統的な発掘調査はアンコール遺跡群では少なく、地上に構築物が残っていない遺構が存在している可能性があり、将来本格的な発掘調査の必要性とを痛感した。研究や修復を本格的に行なうには、短期間の滞在では到底対応できず、研究・修復機関を設けて長期間滞在する必要があろう。

発掘調査と並行して、多くの遺跡群を観察した。アンコール遺跡群と言うとアンコールワットが著名だが、同等規模の遺跡が数十はあり、この地区がクメール文化の宝庫の觀がある。建築として見ると、考えなければならない問題が未解決のままである。遺跡が多く、研究の進展によってクメール文明の解明に向けて期待がふくらむ。修復が一時途絶えている遺跡、修復が未着手の遺跡があり、修復が施された遺跡でも、修復後の様子が安定している遺跡や再修復を必要とする遺跡など、修復という視点だけから考えても複雑で多様な問題がある。 (上野邦一)

貴州トン族の高床住居と集落構成に関する調査と研究 貴州トン族住居調査委員会（主査・田中淡京都大学助教授）では、1988年度以来、住宅総合研究財団の助成をうけて、中国貴州東南地域におけるトン（侗）族の高床住居と集落に関する調査と研究をつづけてきた。88～89年度に実施した第1～2調査では、黔東南苗族侗族自治州を広域的に踏査し、トン族のほかミャオ

族・プイ族・漢族の住居・鼓樓・風雨橋を50棟実測した。90年度は、この成果をふまえて、対象村落を1ヶ所に限定したトン族集落の集中調査をおこなった。調査地は、都柳江沿岸の從江县蘇洞寨（住居数35・世帯数44・人口218）である。

第3次調査に先立ち、貴州省建築設計院が蘇洞の地形測量を実施し、これによって作成された500分の1地図を調査のベースマップとした。本調査は1990年10月8日～11月3日におこない、建築史・考古学・民族学・言語学・民族美術の研究者が日中あわせて9名参加した（奈文研からは浅川・島田・巽が参加）。調査は建築班2班と民族班1班にわかれ、建築班は主要家屋全戸の実測、民族班は全世帯の家族構成と血縁及び婚姻関係の把握を最低のノルマとし、さらに村大工からの聞き取り、部材呼称の音声表記、通過儀礼・祭祀・禁忌などに関する聞き取り、スケッチマップ調査などを相互協力のもとに進めた。この調査の成果は、まもなく『住宅建築』（建築思潮研究所）と『住宅総合研究財団年報』に発表される。

（浅川滋男）

特別研究 南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究 インド亜大陸は仏教発祥の地であり、ここからインドシナ半島にかけて多くの仏教遺跡が残る。それらの大半は煉瓦や石で造られた構造物で、長期間露天で風雨にさらされてきたため損耗や破壊が著しく、その保存整備が急務となっている。当研究所では遺跡・遺物の科学的な保存措置に関する調査研究を行うと共に、遺跡の整備修景とを結合させ、平城宮跡を始めとする各地の遺跡および埋蔵文化財の保存に大きな成果をあげている。この実績を南アジアの仏教遺跡に活用することによって、文化財保護の国際協力に寄与することが本研究の目的である。

1989年度から、インド考古局 Archaeological Survey of Indiaと共に、現地の風土気象条件に見合った保存整備状況を調査し、またインド考古局の専門家を日本に招へいして遺跡の保存整備技術について共同研究を行った。インドでの調査は、デリー、マトゥーラ、パトゥナ、マドラス、ポンペイなどにおいて、石造物・石窟寺院を中心に数十箇所の仏教遺跡を調査した。インドから訪日したのは考古局長である M. C. JOSHI 氏以下 B. K. SHARAN 氏、R. D. TRIVEDI 氏の3名である。

（山本忠尚・高瀬要一・上原真人）

城子山遺跡測量調査 「東北アジアにおける文明の源流の考古学的研究」と題する国際学術研究（研究代表者秋山進午氏）の研究分担者として参加し、中国遼寧省に赴いた。主として「紅山文化」に重点をおき、北京、朝陽、凌源、瀋陽を経て北京にいたる20日間の調査であったが、凌源県にある「城子山」というその時代の遺跡の平板地形測量を、1週間かけておこなったのが主たる業務である。北京では、当研究所に長期研修にこられた文物局の方々とも再会することができた。

（伊東太作）

海外出張報告 肥塚、岩永は2月12日から21日まで「文部省科学研究（国際学術研究）：東アジア地域の古文化財（青銅器および土器・陶磁器）の保存科学的研究」の共同研究者として、スマソニア研究機構などを訪問した。

肥塚は「ブロンズ病と青銅腐食のメカニズム」研究班として、A study of the Corrosion on

Bronzes from Yukinoyama Tumulus をテーマに研究成果の発表を行なった。ブロンズ病発生のメカニズムの理論的考察はすでにできているものの、すべてを実証することが難しく今後継続して研究を進めることになった。また、青銅表面に形成する Black Patina 層にも興味がもたれ、人工説か自然発生説について議論がなされた。また、同様に青銅表面に形成する金属間化合物についても、日米間で専門家による討論の必要性が指摘された。

岩永はデータベース構築のための「中国製、朝鮮半島製、日本製青銅器の鋳型製作、鋳造技術、冶金学的問題」研究班として、The Bronze Production in the Yayoi and Kofun Periods of Protohistoric Japan をテーマに研究成果の発表を行ない、弥生・古墳時代の青銅器生産、特に鋳型の材質とその時期的变化に関わる最近の学説を概観した。

ワシントン滞在中は、CAL (Conservation Analytical Laboratory), Walters Art Galleryなどを訪問して、考古科学、保存科学的諸問題について討論する機会を得た。また、帰路ロサンゼルスにより、GCI (Getty Conservation Institute), Getty Museum, Los Angeles County Museum of Art を訪問し、同様に討論した。しかし、滞在期間が実質 6 日間と短期であったために、充分な意見の交換ができなかつた。

(肥塚隆保・岩永省三)

アメリカ報告 J. D サリンジャーの小説『ライ麦畑でつかまえて』に、ニューヨークの自然史博物館が登場する。ホールデン・コルフィールド少年の思い出の博物館は、いつ行ってもなにひとつ変わらないところだった。この一節を読んだ時、アメリカの博物館に疎い私は、うす暗い展示室、色あせ、ホコリをかぶった展示品の数々、それ自体がまさに「館蔵品」のごとき博物館を想像したのだった。

このほど、文化庁とアメリカスミソニアン研究機構との共同研究の一環としてアメリカに渡り（2月18日～3月3日）、いくつかの博物館を見て、私の想像がとんだ間違いと気づいた。私が見たのは、ワシントンのスミソニアンの巨大な博物館群、ニューヨークの自然史博物館と、メトロポリタン美術館である。この巨大な博物館群の印象は、ひとことで言えばとても面白いのだ。日本でも、楽しい博物館がふえてきたが、それでも博物館に抱くイメージは、古くさく退屈で、博物館めぐりなど年寄り趣味、というのが常識であろう。アメリカの博物館は、これとは別世界で、「専門家」から大人、子供までを対象にわかりやすく、楽しく、そして学問的に高度の展示を行っている。そのためにいろいろとチエを絞り、観客は次にどんな世界が展開するのか、期待に胸をふくらませて新しいコーナーに進めるのだ。これは、「美術館」の総本山のように思われているメトロポリタン美術館でも例外ではない。こうした展示を行う博物館は、私たちのイメージにある博物館とはかけ離れ、むしろTV や映画、演劇などに近いと言えよう。博物館と映像芸術や舞台芸術との違い、それは扱う素材の違いにすぎない。つまり、彼の地の博物館人が考える博物館とは、ものを言わない「遺物」「美術品」をもとに、縦横に新しい世界を切り拓く場なのであろう。

(金子裕之)